

登山中に的確な判断を下すための準備

山本宗彦(陀羅仏同人)

I はじめに

表題の内容について、実は事前にできることは決まっています。箇条書きに項目を並べてしまえばすんでしまう。勿論できることには限りがあり、切り札的なものも特効薬的なものもない。つまりこれから述べる事は登山者なら誰でもできる事であって、実は特殊なことではない。従って、具体的な方法を知ることによって終わりにするのではなく、むしろその方法の背景にある判断力というものの大切さ、特徴、難しさに関する基本的な考え方をまず理解することが最も重要であろう。それを理解していくことで事故の可能性を僅かでも低くしていく努力という登山者に科せられた義務を果たしていけるのであろうし、そうしていくことでさらに各個人の登山は豊かになっていくものと考えている。

II 登山活動における判断力について

まずはじめに確認しておかなければならないことは、判断力という力は最も重要であるが具体的な形がないために最も評価しにくいものであるということであり、しかも最も身につけにくい力であるということである。一般的に競技スポーツにおいては勝つための判断という特徴を持ち、すなわち自分またはチームを具体的な結果に持つていくために判断を積み重ねていくため、勝敗という具体的な結果を前にして反省や検討を行いやすい。しかし登山活動においてはむしろ何も起こさないために判断力が求められることが多く、勝敗という具体的な結果があらわれないのでその時々判断の結果についてはいちいち検討しなくても済ん

でしまう。特に何も起きなかった時は人間は一般的に反省を行にくい傾向にあるし、仮に何か起こって無事帰ってきてても運が悪かったで済ましてしまうことは少なくないのではないか。さらに始末が悪いことに何も判断しなくても無事に終わってしまうことが少ないことだ。しかし致命的な結果になってしまったら反省することすらできなくなってしまふことをつねに自覚すべきである。

登山活動はよく経験の蓄積が重要だと言われ、それは当然のことであるが、人間の一般的な性向として実はあまり学ばないという面もあり、いくら山に行ってもそれはただ単に行っただけで実は判断力は向上していないということは少なくないので、判断力だけに限らず経験を通して身に付く力は山に行けば自然と身に付くものであるという錯覚や思い込みをまず捨てる必要があるだろう。

登山という行為の特殊性は、それが人知を越えた環境の中での活動であるという点に尽きる。そこは千万変化して野生動物でさえ命を落とす、人間にとっては非日常的な環境であるという自覚がまず必要である。そういった環境で行う登山という活動は純粋に技術的な面だけでは解決できないことが沢山あり、どのような登山においても最も普遍的に求められるものは判断力で、この力が登山の中で最も重要であることは論を待たないがいくつかの難しい面をもっているので整理したい。

- 1 大変曖昧で実体がない。
- 2 環境が千万変化するためマニュアル化できない。

- 3 活動する主体である登山者の力量も人によって全く違うので第三者が評価しにくい。
- 4 その判断が正しかったか間違っていたかは最後まで分からない事が多い。
- 5 その判断が間違っているても、判断しなくても結果的に何も起きないことも少なくない。
- 6 その判断が間違っていた場合、致命的な結果につながることもある。

そして人間は弱いものである。人間は間違いをおかす者であるし、高度な判断を迫られる場面は大概状況も大変厳しく冷静でいられることはとても難しい場合が多く、しかもそこには誰もがもつような正確な判断力を鈍らす様々な要素がある。それは外的要因ばかりではなく、時には名誉心や競争心、嫉妬心が介在することがマイナスに働くこともあるし、他人の評価を過剰に意識してしまう場合もある。そしてそれらの要素を含みながら、さらに最終的な判断をするべき立場のリーダーは自分のことだけではなく個々のメンバーのことも把握した上でのチームの力量と状況を分析しつつ判断をしなければならない。これは普段何気なく行っていることも細かく分解していくと大変複雑な組み合わせで成り立っていることの一つの例であるが、何事もおいてもまず分解して自分の手で構築し直した上で総合的に判断をしていくことが必要だ。

なお、遭難時等の判断力については当然重要な課題であるが、ここでは遭難しないために（遭難の確率を減らす＝安全率を上げる）という前提で話を進めていきたいので今回は割愛する。

Ⅲ 事前の準備の実際

1 調査と分析

いわゆる下調べである。山は刻々と変化し、事前調査や資料と状況が違うこと方が多いこと

からそもそも事前の下調べは無意味であるという見方や、その場その場の状況に応じて切り抜けていくことが登山の醍醐味であるという視点から事前の調査をあまり重視しない人もいると聞かすが、私達の多くは天賦の才能に恵まれているわけではない普通の登山者であり、また命知らずの集団でもない。登山するからにはできるだけ楽しみつつ且つ安全に行動して無事に下山し、また山に行くことを前提としたい。最初からイチかバチかの賭けのような登り方をするとは決して賢い登り方とは言えないのではないか。また、事前に調べることは用意する装備等へも当然影響するためより快適な登山をするための一助である。なお、個々のさらに細かい内容はここでは割愛したいが改めて整理する必要があるだろう。

(1) 調査

調査と書くと大袈裟に聞こえるが、その山は本当に自分が登ることができるのかということを考える重要な材料を吟味することである。

- ① 目的の山と山域の概念を含む全容
- ② 登高及び下降予定ルート
- ③ 緊急時に採用する可能性のあるルート
- ④ 入下山のアプローチや入山して目的のルートに取り付くまでのアプローチ
- ⑤ その山域や目的の山の気象の特徴
- ⑥ ルートについては、形状・状況・地形・距離・高度差等も入り、特殊なルートによってはグレードという人為的な困難度の目安も参考になることもある
- ⑦ 過去の遭難事例や遭難場所

尚、個々の詳細についてはそれぞれだけで数ページになろうかと思うので別の機会に譲

1. 登山技術に関する調査研究

りたい。

(2) 分析

山を調べながらメンバー個々の力量やチームの力量を考え、今の自分達にとって目的の山やルートが可能なかどうかを分析しなければならない。その前提は、他パーティの入山状況を当てにするのではなく、全く自分達だけで計画を完遂できるかどうかで考えなければならない。仮に行ってみて登れたとしても、それが他パーティの行動の結果に助けられたものであるならそれは謙虚に反省しなければいけないだろう。

たとえば冬の劔岳に登ろうとするのであれば、どのルートに行くにしても純粋に技術的側面のみならず、全く他パーティがいない状態で56豪雪や今年（2005～2006）の冬のような降雪及び積雪状況でもしっかき生活しながら登って降りてくるだけの経験と力があるかといった多角的な視点が必要である。

2 計画書の作成

登山の実施にあたり、どのような登山であっても計画書を作成し、所定の場所に提出することを鉄則にしなければならない。その登山が近郊のゲレンデであってもヒマラヤの高峰であっても例外を作ってはならない。例外は必ずなし崩し的に拡大していくものであるということを肝に銘じるべきであろう。

そもそも計画書は、それを読めば登山の全貌が第三者に理解されるべき性格のものであり、遭難事故等の際には救出する側の頼れるものは計画書しかないということを念頭に置いて作成しなければならない。さらに、計画書の作成は自分の登山の確認と整理の作業でもある。つまり自分のためでもあるのだ。

計画書の最低限の内容と具体的な提出先は以下の通りである。

(1) 登山計画書の内容

① はじめに

リーダーのその山行に対する決意を表明する。

② 目的

その山に行く目的を明確にする。

③ 期日

実働と予備日を合わせ、最終下山日を必ず明記する。

④ 団体名及び参加者名

団体の代表や参加者については連絡が取れるような内容が必要である。

⑤ 山行場所

山域及び山名等

⑥ 行動計画

毎日の行動予定

⑦ 行動に関する留意点や行動基準

予想される危険や危険箇所に関する注意点や対処方法。行動を変更する場合の判断基準と計画変更案（退却・エスケープ・ショートカット等）

⑧ 参加者一覧表

氏名・性別・年齢・血液型・住所・連絡先

⑨ 現地連絡先

⑩ 留守本部

⑪ 概念図

⑫ 高度距離表や図

⑬ 装備表

共同装備・個人装備

⑭ 食糧計画表

献立表・内容物とその量を示す表

⑮ その他のリスト

衛生具・記録具・気象具・連絡先一覧等

- ⑩ 登山方法によっては露營人数表や高熱運行表等も必要になるだろう。

勿論ゲレンデ等、一部の登山についてはここまで必要ないものもあるが、ここでは冬山を登ることを前提としながらできるだけ普遍的な内容を示した。しかし書き方はともかく計画書の趣旨については行き先がゲレンデでも何ら変わるものではない。いずれにしろ、計画書に記載したことを行う（行うことを記載する）という鉄則が肝心で、計画書に記載していないことを行うということは突発的な遭難救助などのような特殊な状況を除き計画外行動ということでそれは遭難であると認識すべきだと考えていいだろう。たとえば天幕を使用する予定であったのに小屋を使ったとすればそれは天幕では行動できない非常事態となったためであるといった認識が必要である。ここは後述する行動基準の策定とも深く関連するが、少なくとも必然性のある行動予定の変更理由は求められるべきであり、下山後に第三者を納得させられるだけの理由は当然必要である。

(2) 登山計画書の提出先

- ① 自宅
- ② 山岳会代表者・学校山岳部の場合は部長や体育課等で部室にも必ず目につく所
- ③ 目的の山域又は目的の山を管轄する警察署
- ④ 入山口の登山指導所
- ⑤ 山小屋等をベースにしたり、寄って行く場合はその山小屋
- ⑥ 独身の場合は身内か親しい友人、知人
- ⑦ 現地連絡先と留守本部

⑧ その他必要と思われる関係各機関

この提出先も冬山登山を前提としているので登山内容によって若干異なると思うが、いずれにしろ自分が無事に下山できず、第三者が捜索活動を開始することを考えて提出先を決定しなくてはならない。

3 行動基準の策定

これは大変重要な部分である。最終的な判断は勿論山の中で行わなければならない。しかし山の中での判断は得てしてその場の雰囲気の流れされやすく、決定的な判断を先延ばしにしてしまうこともある。先の状況が決定的に悪くなるのが容易に予想される場合はむしろ判断は簡単であろうが、どうしようかと迷う様な状況は少なくなく、しかもそういった時には状況が決定的に悪くなってからでは取り返しがつかなくなってしまいうる。さらに有事の際や状況が悪い場合は精神的にも冷静さを欠いていることが少なくない。そこで想定される範囲で重要な判断をしなければならないことが予想される場合は前もって行動基準を検討して決めておく必要がある。客観的な条件を比較して分析しながら比較的冷静な判断ができる町の中で山に行く前にいくつかの行動基準を決めておくことは大変有効である。よく山菜取りが少しでも多く取ろうとして深みにはまり遭難したという話を聞くが、似たようなことは登山でもあり得る。

行動基準の策定を前もって行うについての留意点については以下のようなになる。

- ① 行動全般を通じて前進か退却かという点
- ② 頂上等を目指す場合の往復行動については引き返し時刻や引き返し場所
- ③ 計画の範囲内における行動の変更基準

1. 登山技術に関する調査研究

④ その他

縦走にしても登攀にしても常に前進か退却かということを考えながら行動するものだと思うが、計画通りの行動であっても、ある一線を境にして退却できなくなる点というものがある。まずそこを明確にしなければならない。場合によっては退却する方が却って危険率が高くなることもあるからである。さらに進むにしても予備日等の残存状況と実働とのバランスが重要である。ある地点でどのくらいの予備があれば先へ進めるのかは前もって十分に検討しておかなければならない。勿論山の中ではその時の燃料や食糧の残量も重要な要素になるので、それらのチェックも必要である。更に言えばだからこそ燃料等は、残量が目に見えないガスではなく1ccの量まで確認できる液体燃料が望ましいだろう。関連するが、そういったことを念頭において考えていくと、予備日の持ち方も全体のボリュームの中でこの部分では最低何日といったような実働ごとの予備日配置的な視点も必要になると思う。またそうすることによって、行動途中においてそれまでの山の状況を勘案しながら実働の消化具合と予備日の消化具合との関連を見直すことでそこまでの計画の妥当性を検討でき、先の予測をする一つの判断材料とすることもできる。

BC等から頂上を往復する等の行動の際には引き返し時間の設定は重要な課題である。そしてそれは往復行動を始めてから状況を見て引き返すこともあろうが、様々な状況を想定して事前に引き返し時刻を決めておかななくてはいけない。まず往復に何時間かかるのか、逆に何時間で行けなければいけないのか、BCに戻ってくる時刻の限界を何時におくのか、そこから逆算

するとどの地点に何時までに着かなければ引き返すという引き返し時刻と引き返し場所をどこに設定するのか、また、引き返し時刻と場所をクリアしたとしても、目標の山頂等に何時までに着かなければそこから引き返すのかなど、できるだけ細かく決めておく方がよい。

さらに付け加えれば、往復行動等の際に持って行く物も共同装備・個人装備共に前もって決めておく。チーム全員で検討し、意見を出し合い、不備がないようにしておくことはチーム内で高めておくべき目的意識の共有化にも有効であるはずだ。

尚、策定した行動基準については下山後に検討して見直すことは当然のことであり、それを繰り返すことによって事前に策定した行動基準と実際の現場の状況が違う時の対応能力も高まっていくと考える。

ちなみに登山研修所の大学山岳部リーダー夏山研修会において、かつて次のような演習を行ったことがある。5月の白馬岳東面、双子岩のある小日向のコルから唐松岳を往復するとして、ルート状況の予想、用意すべき装備、引き返し時刻と場所の設定、唐松岳最終到達時刻の設定等を学生に考えさせて発表させた。大分悩んでいたようであったが十分に応用のできる実践的な課題であり勉強になったと感じた。できれば発表されたことをお互いに検討しあってみればもっといいだろうし、もし可能であれば、6月の研修会時に実際に剣沢前進基地から往復できるルートを設定し、そのルートで考えさせ、研修会中にそこに実際に自分達が策定した基準で行ってみれば構築したことを実際に試してみることができるとさらに実践的な研修となるのではないだろうか。

4 山岳会・山岳部が日常の活動の中で行う遭難防止対策と体制作り

組織的な面についてはそれだけで多岐にわたり一冊の本ができしうだろうが、ここでは特にチームとしての教育機能とリーダーシップの面について若干言及したい。

まず組織としての出発点としては、チームとしてのあり方を確立するところから始まる。チーム内のリーダーシップとメンバーシップを確立し、山行計画の立案から実施、実施後の検討報告までの流れをおろそかにせず、登山活動全般に関する研究会や学習会や搬送救助訓練の実施などを定期的に行い構成員の登山に対する意識を高めておかなければならない。要するに、当たり前のことが当たり前に確立し、機能しているチームを作らなければならないということである。そういった中で先に述べたような意識の共有化がはかられて経験の蓄積と継承が行われていくと考える。人間個人の経験には限界がある以上、チームの仲間や他のパーティの経験は教訓として自分の中に蓄積し、それを継承していくことと学んでいくことはとても大切なことなのではないだろうか。これは組織論や登山活動論を越えて、人間は先に生まれた者は後に続く者に何かを伝えていかななくてはならない責任があるということなのではないかとも思う。猿が蛇を危険なものとして近づかないという行動は先天的なものではなく、後天的に学習という行為の結果身に付くものと言われているが、もし私達が他人の経験から何も学べないとしたらまさに猿以下になってしまうであろう。

IV まとめにかえて

以上述べてきた中で最も大事なことは、“自分で決めたことは絶対に守る”の一言に尽きる。登

山には競技スポーツにあるような成文化されたルールブックはなく、基本的には登山者自らが作らねばならない。逆に言えばそれが登山をして最も自由な表現活動であるとする所以であろうが、だからこそ登山は最初から最後まで自分達で作らなければいけないし、その自由を享受して行使するためには自分達で決めたこと（ルール）は絶対に守ることが鉄則となる。山の中での多少の計画変更はともすると状況に応じてという言葉をやさしく逃げ道にして安易に行ってしまうこともあるが、人間はどこかで意識的に歯止めをかけないと崩壊的にどこまでも安易な方向へ流れてしまうものなのではないだろうか。

ここまで長々と述べてきたことは全てそういった“自分で決めたことは自分で守る”ということが前提になっていて、そうあってこそ登山は真に自由の表現となりうるし、実行者自身が真の主体者となるのではないだろうか。

勿論、山は人間の想定をはるかにこえる姿を人に見せることも珍しくないのに、計画の変更とか臨機応変な状況判断というのは登山活動の中で当然起こりうることであるが、それが事前決めておいたことではない場合、そこには第三者を納得させられるだけの根拠が必要とされるのだという厳しさを常に自分に課しておかなければいけないということではないだろうか。

登山はどんなに周到に計画し準備してもその通りになることはむしろ稀であろう。だからこそ、山に登る前にできることは全てやってから山に行くという、極めて当たり前のことを当たり前にやっていくことが重要であり、それで初めて、山の中では“当たり前でない時に当たり前のことが当たり前になる”ような登山者に近づけていけるのではないだろうか。